

「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料(小学校, 中学校)

第3編 単元ごとの学習評価について(事例)

【案】

第1章 「内容のまとまりごとの評価規準」の考え方を踏まえた評価規準の作成

- 1 本編事例における学習評価の進め方について
- 2 単元の評価規準の作成のポイント
 - (1) 総合的な学習の時間における単元及び単元の目標
 - (2) 単元における評価規準の作成

第2章 学習評価に関する事例について

- 1 事例の特徴
- 2 各事例概要一覧

事例

国立教育政策研究所
教育課程研究センター

第1章 「内容のまとめりととの評価規準」の考え方を踏まえた評価規準の作成

1 本編事例における学習評価の進め方について

各教科の単元における観点別学習状況の評価を実施するに当たり、まずは年間の指導と評価の計画を確認することが重要である。その上で、学習指導要領の目標や内容、「内容のまとめりととの評価規準」の考え方等を踏まえ、以下のように進めることが考えられる。なお、複数の単元にわたって評価を行う場合など、以下の方法によらない事例もあることに留意する必要がある。

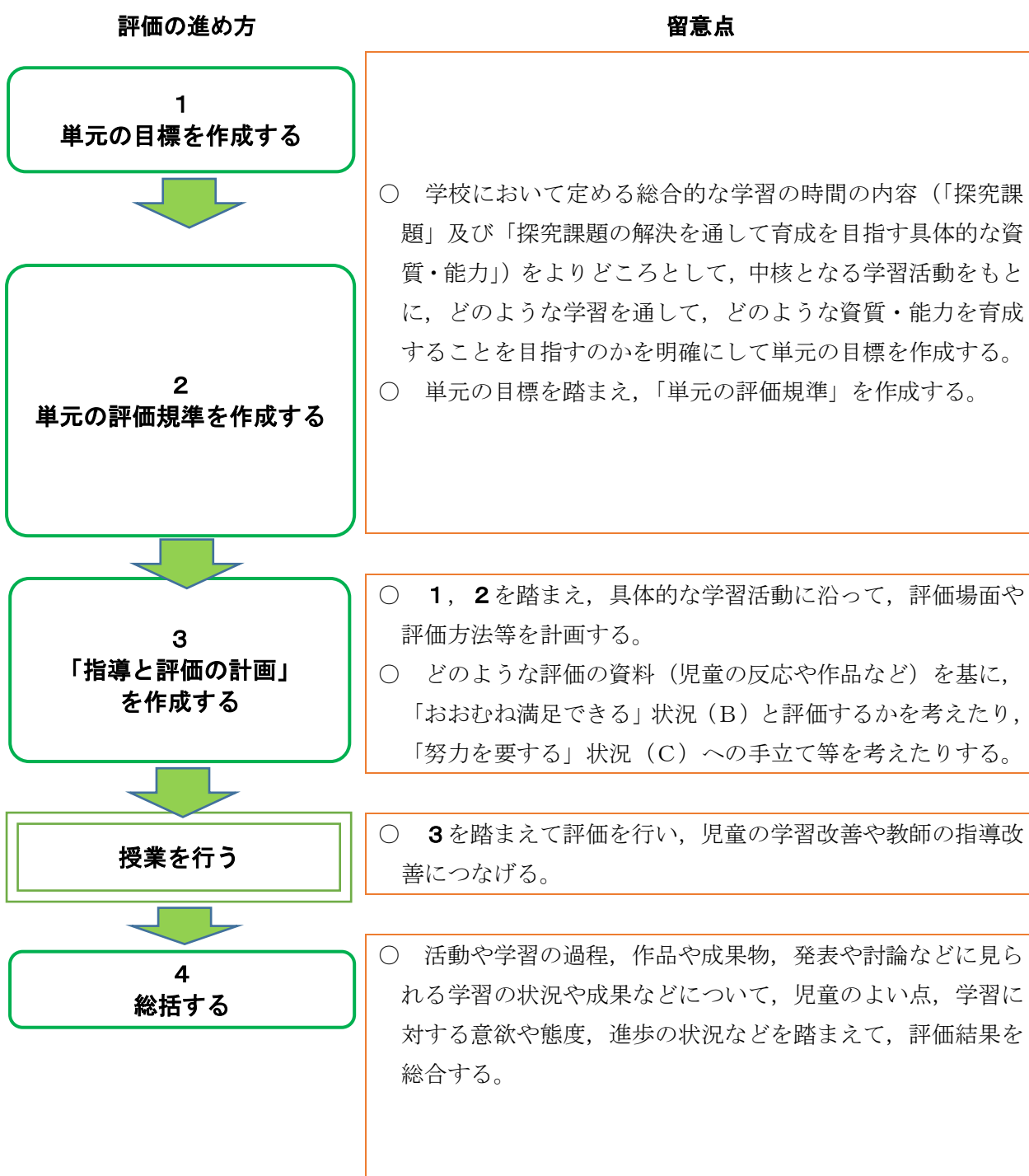
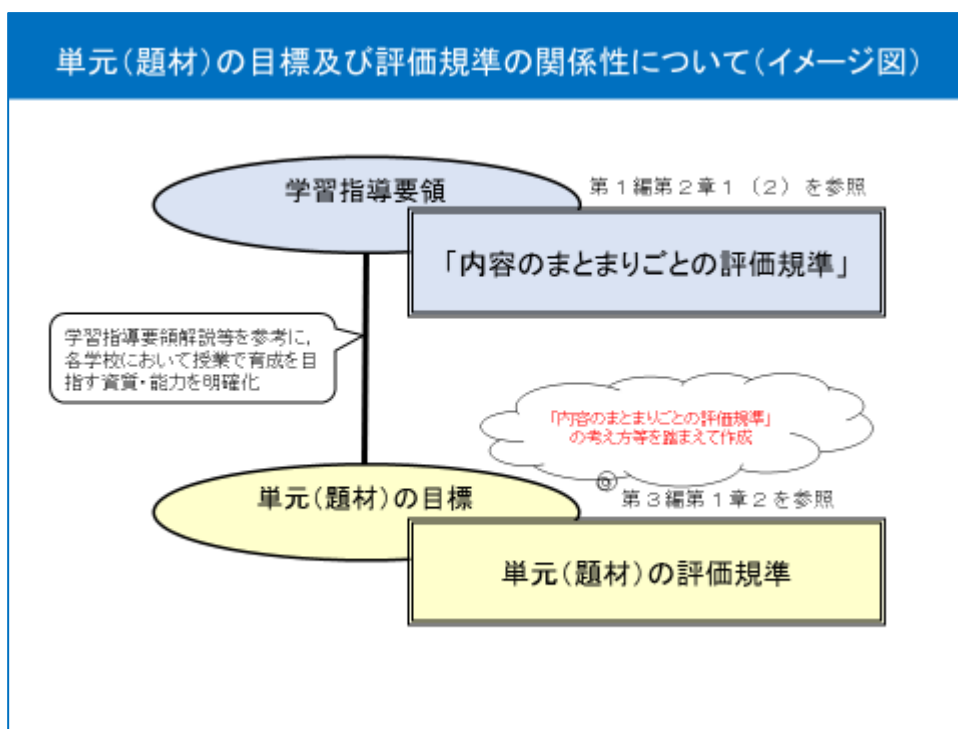


図 1



※ 調整中

2 単元の評価規準の作成のポイント

(1) 総合的な学習の時間における単元及び単元の目標

学習指導要領には、各教科等のようにどの学年で何を指導するのかという内容を明示していない。各学校は、学習指導要領が定める目標を踏まえ、総合的な学習の時間の内容を定めることとされている。

総合的な学習の時間における「内容のまとまり」は、目標を実現するにふさわしい探究課題と、探究課題の解決を通して育成を目指す具体的な資質・能力の二つによって構成される。両者の関係については、目標の実現に向けて、児童が「何について学ぶか」を表したものが探究課題であり、各探究課題との関わりを通して、具体的に「どのようなことができるようになるか」を明らかにしたものが具体的な資質・能力という関係になる。(表1)。

表1 総合的な学習の時間における「内容のまとまり」

各学校において定める内容			
目標を実現するにふさわしい 探究課題		探究課題の解決を通して育成を目指す 具体的な資質・能力	
例	現代的な諸課題に対応する 横断的・総合的な課題 (国際理解, 情報, 環境, 福祉・健康など)	知識及び技能	思考力, 判断力, 表現力等
	地域や学校の特色に応じた課題 (地域の人々の暮らし, 伝統と文化など)	他教科等及び総合的な学習の時間で習得する知識及び技能が相互に関連付けられ, 社会の中で生きて働くものとして形成されるようにする	探究的な学習の過程において発揮され, 未知の状況において活用できるものとして身に付けられるようにする
	児童の興味・関心に基づく課題		学びに向かう力, 人間性等 自分自身に関すること及び他者や社会との関わりに関することの両方の視点を踏まえる

単元の目標は、どのような学習を通して、児童にどのような資質・能力を育成することを目指すのかを明確に示したものである。各学校において定める目標や内容を視野に入れ、中核となる学習活動を基に構成する。

（２）単元の評価規準の作成

単元の評価規準における評価規準は、単元の目標を踏まえて作成する。

〔単元の評価規準を作成する手順〕

- ① 単元の目標を確認する。
- ② 単元の目標に示された資質・能力を踏まえ、目指すべき学習状況としての児童の姿を想定し、単元の評価規準を作成する。

（例） 第6学年 「地域の絆を再生しよう」に基づいた作成の手順

- ① 単元の目標を確認する。

〔単元の目標〕

少子高齢化や核家族化を背景に、さみしさを抱えながら暮らす高齢者の孤独の解消に向けて活動することを通して、高齢者のくらしを支える取組や人々の思いに気づき、高齢者のくらしを支える「地域の茶の間（地域の人々が集い交流できる場）」の在り方について考えるとともに、学んだことを自らの生活や行動に生かそうとすることができるようにする。

- ② 単元の目標に示された資質・能力を踏まえ、単元の評価規準を作成する。

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
① 高齢者のくらしを支える取組や人々の思いを基に、「地域の茶の間」は、地域の人と思いを共有し、協働でつくることで持続可能なものとなることを理解している。 ② 高齢者とその暮らしについて学んだことが自分の生活と深く関わっていることを理解している。 ③ 「地域の茶の間」を開催したり、モデルケースを調査・体験したりして収集した情報と情報との関係について、図や文章でまとめる方法がわかっている。	① 地域の高齢者とその暮らしについて、理想との隔たりから課題をつくり、解決に向けて自分にできることを考えている。 ② 高齢者の孤独の解消のために必要な情報を、手段を選択して収集している。 ③ 持続可能な「地域の茶の間」をつくるために必要な情報を取捨選択したり、複数の情報を比較したり関係付けたりしながら解決に向けて考えている。 ④ 伝える相手や目的に応じて、自分の考えをまとめ、適切な方法で表現している。	① 活動を通して、自分と身の回り的高齢者とのかかわりを見直そうとしている。 ② 「地域の茶の間」の体験を通して得た知識や自分と違う友達の考えを生かしながら、協働して課題解決に取り組もうとしている。 ③ 課題解決の状況を振り返り、あきらめずに高齢者の孤独の解消に向けて取り組もうとしている。

育成を目指す資質・能力を踏まえた評価規準の作成のポイント**(1) 知識・技能**

児童は、これまでの経験や教科等での学習において、様々な「知識及び技能」を習得している。さらに、総合的な学習の時間においては、実社会や実生活に関わる課題の解決や体験活動を通して、様々な具体的な知識や個別的な技能を得る。それらは、主体的で協働的な課題解決を通して相互に関連付けられ、統合されることによって、概念として形成されることが目指される。具体的な事実に関する知識や個別的な手順の実行に関する技能は、課題解決の中で活用されることを通して、特定の文脈に限らず、他の文脈や日常生活の中でも活用可能なものである生きて働く概念的な知識となる。

「知識・技能」の評価は、探究的な学習の過程を通して得られた「知識及び技能」を既有的「知識及び技能」と関連付けて統合された概念として形成していく過程に着目し、評価規準と照らし合わせて、学習や指導の改善を図るものと考えることができる。

例えば、事例編で示す、持続可能な「地域の茶の間」の在り方を話し合う場面では、「高齢者の立場に立って、気持ちを考えることが大切だ」という考えをもっていた児童が、対話を通して「地域の人の立場に立って、地域の人にとっても必要となる場になることが大切だ」という考えにも気付いた。そして、それら二つを統合的に考えることで、「地域の茶の間は高齢者のためだけではなく、地域の人にとっても大切だと思える場であり、そういう場を地域との協働でつくることが大切だ」といった概念を形成するに至った。これは、福祉とは何かということを考える際の重要な概念となることが期待される。

課題の解決に必要な技能は、探究的な学習の過程の各学習活動で用いる個別的な手順の実行に関する技能と考えることができる。例えば、学習の基盤となる資質・能力として例示されている「情報活用能力」に位置付けられているような、インタビューの計画を立てる技能、資料の大事なことを読み取ってまとめる技能などが考えられる。こうした技能は、各教科等の学習を通して、事前にある程度は習得されていることを前提としつつ、探究を進める中でより高度な技能が求められるようになり、技能を活用することを通して、「どのような場面でその技能を使うことができるか」や「その技能を使うことでどのような結果や効果が得られるか」といった、技能の活用方法や性質も理解できるようになる。

このように、課題を解決する過程を繰り返していくことで「探究的な学習のよさ」を理解することにもつながる。

「知識及び技能」を評価するにあたっては、まずは内容の設定の段階において、探究課題で扱うテーマから考えられる概念から学習活動を想定して具体化したり、学習活動を進める中で児童が得るであろう個別的・具体的な知識や技能を参考にしたりして、子どもたちにどのような概念の形成を期待するのかということを明示することが重要である。

(2) 思考・判断・表現

総合的な学習の時間においては問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現するという、探究的な学習の過程の各学習活動において、経験から得られた情報や身に付

けた「知識及び技能」の中から、目的にかなったものを選びだしたり、複数の「知識及び技能」を組み合わせて、適切に活用できるようになることが目指される。「思考力・判断力・表現力等」の評価は、日々の生活やこれまでの学習経験や体験活動を通して得た情報やこの時間や各教科等で習得した「知識及び技能」を活用して課題を解決する等のために必要な「思考力、判断力、表現力等」を身に付けているかどうかを見とり、評価規準と照らし合わせて、学習や指導の改善を図るものと考えることができる。

評価にあたっては、探究の過程における各学習活動の目的に即して、「知識や技能」を適切に活用する姿やその過程に着目する。

<課題の設定>

課題の設定においては、実社会や実生活と関わる体験活動や資料にふれることで、対象に対して関心や興味が高まる。それとともに、関わりをもった対象に対して素朴な気付きや疑問を抱いたり、「ずれ」や「懂れ」を見いだしたりする。

また、探究的な学習への習熟が高まるにつれ、課題の設定に伴って、解決方法を選び出したり、適切な手順を決めることを通して、課題解決に見通しをもったり、計画を立てたりすることができるようになる。こうした過程を繰り返すことで、問題状況の把握や仮説を立てて課題解決に取り組めるようになる。

<情報の収集>

情報の収集においては、設定した課題に関連する情報を様々な方法を用いて収集し、次の整理・分析に向けて蓄積することになる。情報収集の方法を目的や状況に応じて選択したり、他の教科等で学習した情報収集のための技能を活用したりすることもできる。すでに学習した方法が目的にあうかどうかを判断したり、多様な情報を得るための対象を選択したりする。

探究的な学習への習熟が高まるにつれ、次第に情報収集の手段を選んだり、実際に収集する活動を繰り返し経験することで、実際の手順や得られる結果を見通したりすることができるようになり、より効率的・効果的な手段選択や目的に応じて多様な方法から選択できるようになる。

<整理・分析>

整理・分析においては、収集・蓄積した情報を使いみちをを考えて分けたり、選び出したり、使いやすいように整えたりすることになる。また、そうした情報を、関係性をもとに分類したり、因果関係を捉えたり、順序性を見いだしたり、統計的な手法を用いて新たな値を求めたり、適切にグラフ化したりする。

また整理・分析の結果、情報収集が足りないことに気付いたり、考えをまとめる中で再度、異なる方法で整理・分析を行ったりするような試行錯誤を繰り返すことも思考力等の表れと捉えることができる。

探究的な学習への習熟が高まるにつれ、整理・分析に用いる方法と目的や課題解決の方向性を比較して吟味したり、振り返ったりすることで、より深い分析や自分の考えへの確かな根拠付けができるようになる。

<まとめ・表現>

「まとめ・表現」においては、整理・分析した結果や自分の考えをまとめたり、他者に伝えることで、より考えが鮮明になったり、新たな課題を見いだすことにつながる。より効果的にまとめたり、伝えた

りするには、目的意識を明確にしたり、伝える相手を意識して、適切な方法を選択することになる。各教科等で学習した表現方法を活用することも考えられる。こうした過程で、自らの考えを異なる立場から見たり、より伝わりやすいように提示する情報を並べ替えたりして論理的に表現することで考えがさらに深まったり、その考えてきたことの価値を理解したりする。それにより、表現方法が熟達したり、そのよさを実感したりすることができる。また、まとめ・表現を通して振り返る中で、対象や自分自身に対する理解が深まったり、新たな課題を見付けたりすることができる。

探究的な学習への習熟が高まるにつれ、より論理的で効果的な表現を工夫したり、対象や自分自身に関して深い気付きとなるような内省的な思考ができるようになったりもする。

このような探究的な学習の過程においては、「考えるための技法」や思考ツールを活用することが考えられる。評価の際には、児童が身に付けた「考えるための技法」を適切に活用しているかどうかを評価することが大切である。自らの課題解決の方法を自覚的に捉えたり、目的と対象を明確にして、どのような「考えるための技法」や思考ツール、知識や技能を用いるのがよいのかを吟味したりする過程を把握することもまた、思考力・判断力・表現力等を見取ることになる。例えば、活動を決める際に、できそうな活動を洗い出し、「誰とするか」「どれくらい時間がかかるか」という2軸を児童が設定し、座標軸を用いて「分類する」ことで、クラス全体で取り組むべき活動を設定する場面では、児童が目的に応じて「分類する」技法を選択し、それに応じた思考ツールを活用することで活動を決定している。この場面においては、これらの選択・活用は適切であると判断することができる。

「思考力、判断力、表現力等」を評価するに当たっては、まずは内容の設定の段階において、探究課題の特質から想定される問題状況、収集が可能な情報の性質、整理・分析において有効な観点、まとめ・表現において想定される相手や目的などを十分に検討することが大切である。その上で、探究的な学習の過程において、児童が相手や目的に応じてどのような「知識及び技能」や、各種の「考えるための技法」等を選択し、活用できるかということを想定することが必要である。

(3) 主体的に学習に取り組む態度

「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、探究的な学習の過程において見通しをもち、自ら計画をたてて自律的に課題解決に向かう主体的な態度と、他者とともに課題解決に取り組み、多様な考えを生かして新たな知を創造しようとする協働的な態度の形成を基盤として、知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面と、粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面、という二つの側面を見とり、評価規準と照らし合わせて、学習や指導の改善を図るものである。

粘り強い取組を行おうとする側面とは、探究的な学習に協働して取り組む中で、継続的に自らの問いや学びの意義を見いだし、課題解決に取り組もうとする態度に表れると考えられる。また、粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面は、他者との協働を通して進める課題解決の過程で自らの学びを振り返りながら、その後の学習活動に見通しをもって、自ら計画を立てたり、適切な方法を選択したりして取り組む姿として表れると考えられる。そして、この2つは相互に関連して立ち現れる。

評価にあたっては、児童がこの時間を通して期待されている自己の生き方を考えたり、社会に参画しようとしたりする態度につながる学習活動への取組として、問いを立てることや解決に向けた見通しをもつ姿に着目する。

粘り強い取組を行おうとする側面とは、主体的・協働的に課題解決に取り組む中で、対象とする知識や対象世界をより深く知ろうとしたり、様々な方法を用いて繰り返しアプローチしたりする試行錯誤から自ら見いだしたことを視点にして、自分の経験や知識、疑問を問い直し、さらに自分にとって価値ある問いや新たな問いを生み出していこうとする姿である。

具体的には探究的に学習を進めていく過程で、新たな「知識及び技能」を得たり、「思考力、判断力、表現力等」を発揮して課題解決に取り組んだりすると、これまで抱いていた疑問が解決したり、知りたいと思ったり、関わりたいと思っていた対象への思いや願いが充足されたり、理解が進む。粘り強い取組を行おうとする姿は、こうした自らの学びの過程を振り返ることを通して、更により深く知りたいことや、自分にとって価値のあることは何かといったことを考えようとする姿であり、それは自らの問いを問い続けていく姿として捉えられる。例えば、地域の祭りに関心がなかった児童が、地域の祭りに関する詳細な説明を聞き、どうしてその舞を踊るのかという問いをもつ。その後、舞の体験や保存会の方へのインタビューを通して、地域の祭りへの愛着を深めるとともに祭りの存続の危機に直面していく。そして、地域の祭りの存続への切実感を高め、自分たちで広報活動をするという課題へと更新していく姿が考えられる。

粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面とは、他者との協働を通し、自らの学びを振り返りながら、課題解決に向けて見通しをもって、自ら計画を立てたり、適切な方法を選択したりするといったことに現れる積極的に活動に取り組む姿である。

具体的には取り組んできた学習活動や自らの思考を振り返り、よりよく対象に関わったり、深く知ったりするために、次の課題を見いだしたり、活動の在り方や方法を自ら計画するなどして、次への見通しをもつ姿や、学んできたことを生かしたり、自分にとっての価値を見いだしたりして、今後の自分がどのように関わられるのかという自己の生き方を考える姿として捉えられる。また整理・分析の結果、情報収集が足りないことに気づいたり、考えをまとめる中で再度、異なる方法で整理・分析を行ったりするような試行錯誤を繰り返す姿としても捉えることができる。

「学びに向かう力、人間性等」を評価するためには、自分自身に関すること及び他者や社会に関することの両方の視点を踏まえることが求められる。その上で、活動の見通しをもつ場面や各時間や単元の振り返りの場面の観察や作文などを通して、自らの課題を更新しているかどうかや、児童が自らの学習活動を適切に把握し、見通しをもって学習を進めようとしているかどうかを把握することが大切である。

1 事例の特徴

第1編第1章2（4）で述べた学習評価の基本的な方向性を踏まえつつ、平成29年改訂学習指導要領の趣旨・内容の徹底に資する評価の事例を示すことができるよう、本参考資料における各教科の事例は、原則として以下のような方針を踏まえたものとしている。

○ 単元（題材）に応じた評価規準の設定から評価の総括までとともに、児童生徒の学習改善及び教師の指導改善までの一連の流れを示している

本参考資料で提示する事例は、いずれも、単元（題材）の評価規準の設定から、最終的に学習過程で得た評価情報を総括するまでとともに、評価結果を児童生徒の学習改善や教師の指導改善に生かすまでの一連の学習評価の流れを念頭においたものである。なお、各教科とも事例の一つは、この一連の流れを特に丁寧に示している。

○ 観点別の学習状況について評価する時期や場面の精選について示している

報告や改善等通知では、学習評価については、日々の授業の中で児童生徒の学習状況を適宜把握して指導の改善に生かすことに重点を置くことが重要であり、観点別の学習状況については、毎回の授業ではなく原則として単元や題材など内容や時間のまとまりごとに、それぞれの実現状況を把握できる段階で行うなど、その場면을精選することが重要であることが示された。このため、観点別の学習状況について評価する時期や場面の精選について、「指導と評価の計画」の中で、具体的に示している。

○ 評価方法の工夫を示している

各教科・科目の評価の中で、ワークシートや作品などの評価材料をどのように活用したかなど、教科の特性に応じて、評価方法の多様な工夫について示している。

2 各事例概要一覧（小学校）

事例1 キーワード 指導と評価の計画から評価の総括まで

「****（単元名）****」（第*学年 「*（テーマ）*」）

探究課題「*****」に基づく第*学年の単元を例として、指導と評価の計画の立案から評価の総括までの事例を紹介する。

本事例は、評価の計画として特に、指導と評価の計画、三つの観点と評価の実際、観点別評価結果の総括まで、一連の評価活動を取り上げることで、総合的な学習の時間における指導と評価の概要が把握できるようにした。

事例2 キーワード 「知識・技能」の評価

「地域の絆を再生しよう」（第6学年 福祉）

探究課題「身の回りの高齢者とそのくらしを支援する仕組みや人々（福祉）」に基づく第6学年の単元について、「知識・技能」の評価を行う事例を紹介する。

事例3 キーワード 「思考・判断・表現」の評価

「川的美しさを取り戻そう」（第4学年 環境）

探究課題「地域の自然や環境と、その保全に関わる人々の思いや願い（環境）」に基づく第4学年の単元について、「思考・判断・表現」の評価を行う事例を紹介する。

事例4 キーワード 「主体的に学習に取り組む態度」の評価

「北野のじまん『おくんち』を伝えよう」（第4学年 伝統文化）

探究課題「地域の伝統や文化とその継承に力を注ぐ人々（伝統文化）」に基づく第4学年の単元について、「主体的に学習に取り組む態度」の評価を行う事例を紹介する。

2 各事例概要一覧（中学校）

事例1 キーワード 指導と評価の計画から評価の総括まで

「未来の人も豊かな暮らしをするために」（第1学年 資源・エネルギー）

第1学年「資源エネルギー」を例として、指導と評価の計画の立案から評価の総括までの事例を紹介する。

本事例は、評価の計画として特に、指導と評価の計画、三つの観点と評価の実際、観点別評価結果の総括まで、一連の評価活動を取り上げることで、総合的な学習の時間における指導と評価の概要が把握できるようにした。

事例2 キーワード 「知識・技能」の評価

「仕事を通して自己の生き方を考える」（第2学年 職業）

探究課題「*****（職業）」に基づく第2学年の単元について、「知識・技能」の評価を行う事例を紹介する。

事例3 キーワード 「思考・判断・表現」の評価

「地域の平和を願って」（第3学年 平和）

探究課題「*****（平和）」に基づく第3学年の単元について、「思考・判断・表現」の評価を行う事例を紹介する。

事例4 キーワード 「主体的に学習に取り組む態度」の評価

「外国人観光客を案内しよう」（第*学年 まちづくり）

探究課題「*****（まちづくり）」に基づく第*学年の単元について、「主体的に学習に取り組む態度」の評価を行う事例を紹介する。

総合的な学習の時間 事例 2

キーワード 「知識・技能」の評価

単元名

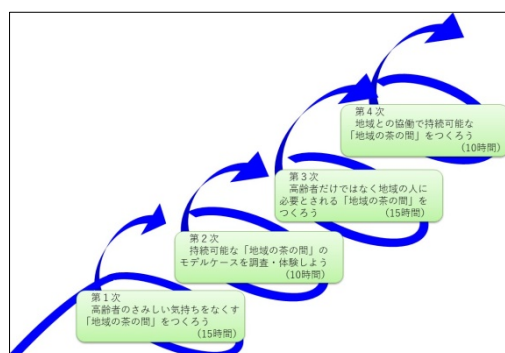
地域の^{きずな}絆を再生しよう 全 50 時間

内容のまとめ

第 6 学年（福祉）

本単元は、探究課題「身の回りの高齢者とその暮らしを支援する仕組みや人々」を基盤に開発した単元である。単元化の背景には、学校周辺地域に内在する実社会の問題がある。地域住民の高齢化と核家族化により、「今日一日誰とも話をしなかった」「気が付いたらテレビに話しかけていた」といったさみしさを抱えながら孤独に暮らす高齢者が増加していた。

本単元は、子供が日常生活を送るうえでは気づかなかったこのような状況を問題だと捉え、高齢者の孤独の解消に向けて、地域の誰もが集い交流できる「地域の茶の間」を創設することを学習課題として設定し、その解決に向けて取り組んだものである。



1 単元目標

少子高齢化や核家族化を背景に、さみしさを抱えながら暮らす高齢者の孤独の解消に向けて活動することを通して、高齢者の暮らしを支える取組や人々の思いに気づき、高齢者の暮らしを支える「地域の茶の間（地域の人々が集い交流できる場）」の在り方について考えるとともに、学んだことを自らの生活や行動に活かそうとする。

2 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①高齢者の暮らしを支える取組や人々の思いを基に、「地域の茶の間」は、地域の人と思いを共有し、協働でつくすることで持続可能なものとなることを理解している。 ②高齢者とその暮らしについて学んだことが自分の生活と深く関わっていることを理解している。 ③「地域の茶の間」を開催したり、モデルケースを調査・体験したりして収集した情報	①地域の高齢者とその暮らしについて、理想との隔たりから課題をつくり、解決に向けて自分にできることを考えている。 ②高齢者の孤独の解消のために必要な情報を、手段を選択して収集している。 ③持続可能な「地域の茶の間」をつくるために必要な情報を取捨選択したり、複数の情報を比較したり関係付けたりしながら解決に向けて考	①活動を通して、自分と身の回りの高齢者とのかかわりを見直そうとしている。 ②「地域の茶の間」の体験を通して得た知識や自分と違う友達の考えを生かしながら、協働して課題解決に取り組もうとしている。 ③課題解決の状況を振り返り、あきらめずに高齢者の孤独の解消に向けて取り組もうとしている。

と情報との関係について、図や文章でまとめる方法がわかっている。	えている。 ④伝える相手や目的に応じて、自分の考えをまとめ、適切な方法で表現している。	
---------------------------------	--	--

3 指導と評価の計画

次（時間）	ねらい・学習活動	知	思	態	備考
高齢者のさみしい気持ちをなくす 「地域の茶の間」をつくろう （15時間）	・地域の高齢者とその暮らしについて調べ、高齢者の困りごとに気付き、理想と現実の隔たりから学級全員で取り組む課題を設定する。 ・必要な情報を調べながら、「地域の茶の間」の計画（場所や日時、プログラム等）を立てる。 ・学習課題に照らし、「地域の茶の間」の計画を修正・改善する。 ・計画を修正・改善しながら複数回の「地域の茶の間」を開催する。	①	①	①	知：作文シート 思：発言内容 作文シート 態：発言内容 作文シート
持続可能な「地域の茶の間」のモデルケースを調査・体験しよう （10時間）	・「地域の茶の間」の活動を振り返り、活動の意味や価値を考えることで、課題を再設定する。 ・「地域の茶の間」を持続可能な形で運営しているモデルケースの調査・体験活動を行い、必要な情報を収集する。 ・モデルケースの特徴を整理し、その背景を分析することで、高齢者のくらしを支える人の工夫や思いに気付く。 ・自分たちが開催した「地域の茶の間」とモデルケースの調査・体験活動を基に、持続可能な「地域の茶の間」の在り方について考え、概念的知識を形成する。	① ③ ①	① ② ③	① ②	思：発言内容 作文シート 知：作文シート 思：行動観察 作文シート 技：ファシリテーショングラフィック 知：発言内容 作文シート 思：発言内容 作文シート 態：発言内容 行動観察 【次項4(1)で詳説】
高齢者だけでなく地域のの人に必要とされる「地域の茶の間」をつくろう	・概念的知識を基に、課題を再設定する。 ・必要な情報を調べながら、「地域の茶の間」の計画（場所や日時、プログラム等）を立てる。		②	②	思：発言内容 行動観察 態：発言内容

(15時間)	・学習課題に照らし、「地域の茶の間」の計画を修正・改善する。 ・計画を修正・改善しながら複数回の「地域の茶の間」を開催する。		④		行動観察 思：行動観察
地域との協働で持続可能な「地域の茶の間」をつくろう (10時間)	・これまでの活動で課題が解決されたかを振り返り、課題を再設定する。 ・地域の誰と協働すればよいかを考える。 ・地域の方に、協働で「地域の茶の間」を継続開催することを働きかける。 ・これまでの活動を通しての自分の変化を振り返り、作文にまとめる。	②		③ ④ ①	態：発言内容 作文シート 思：作文シート 行動観察 知：作文シート 行動観察 【次項4(2)で詳説】

4 観点別学習状況の評価の進め方

(1) 概念的知識の形成

「知識・技能」の評価は、第2編第3章(1)1-①に詳説しているとおり、具体的・個別的な事実だけではなく、それらを既存の知識及び技能と関連付けたり活用したりする中で、他の学習や生活の場面でも活用できる程度に概念等を理解したり、技能を習得したりしているかについて評価することがポイントとなる。

これを受け、本項では、主に概念的知識の習得状況の評価を中心に紹介する。

①評価場面

単元の導入で、高齢者の孤独を解消するために他の地域で取り組まれている「地域の茶の間」の活動が、学校周辺地域では存在しないことを知った子供は、「高齢者のさみしい気持ちをなくすために、『地域の茶の間』をつくろう」という学習課題を設定した。

そして、第1次で、実際に「地域の茶の間」を企画し、コミュニティーハウスを会場に借り、チラシを配布するなどして地域に呼びかけ、複数回の「地域の茶の間」を開催した。

参加した高齢者から喜ばれ、活動の意味や価値を実感した子供は、「自分たちが卒業してもずっと高齢者のさみしい気持ちをなくせる地域の茶の間をつくりたい」と願い、課題を更新した。「地域の茶の間」の開催に留まらず、継続的に開催できる「地域の茶の間」を生み出そうと願ったのである。

しかしながら、どうすれば持続可能な「地域の茶の間」の仕組みを構築できるのか、具体的な方法が思い浮かばない。

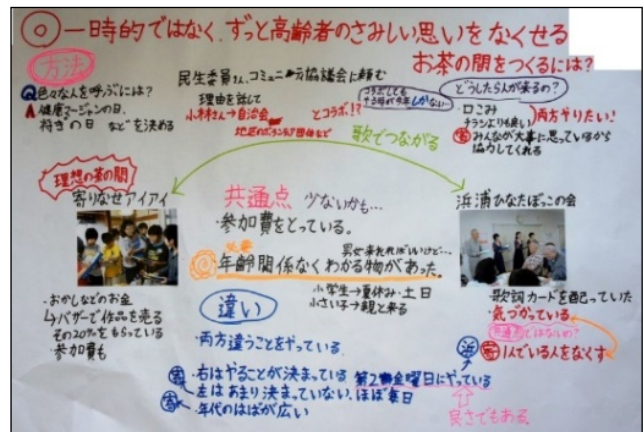


そこで、第2次として、継続して運営されている他の二つの「地域の茶の間」の取組をモデルケ

ースとして位置付け、調査・体験する活動に取り組んだ。

その後、資料1のように、この二つの「地域の茶の間」の取組の共通点と相違点を可視化し、収集した情報を整理・分析した。

本評価場面は、授業者が、学習課題の解決のために大切なことは何かを問い、それについて話し合う言語活動を設定した場面である。



資料1 共通点と相違点をまとめた
ファシリテーショングラフィック

②子供の事実とその解釈、評価

教師：「一時ではなく、ずっと高齢者のさみしい思いをなくせるお茶の間」をつくるために大切なことって、何だろう？

A児：私は、**来てくれた人がどう思ってくれるかが大切**だと思います。自分たちがお茶の間をした時に、「若い人がやってくれるから気持ちが若くなった」と言われたからです。

B児：Aさんに付けたしで、…「寄りなせあいあい」の人が「お茶の間は、来れば話せる相手がいて和める場所」と言っていました。だから、それを意識しながら**どういうふう**
に和めるだろうかと考えながら行動することが大切だと思います。

C児：Bさんに付けたしで、「**特技発表をやってください**」と誘うと、うれしくなって**気持ちも和む**と思います。

D児：付けたしです。「寄りなせあいあい」の人が言っていたんですけど、「みんなが『寄りなせあいあい』のことを大事にしているから、必要としているからなくならないようにお金とか、そういうことで協力してくれる」って。だから、私は、**地域の人に必要とされるように思ってもらわなくてはならない**と思います。

E児：Dさんに付け足しで、**AさんとBさんとCさんの考えがすべてつながって**、「みんなが大事に思ってくれているから協力してくれる」っていうのは、**地域の人が「こういうお茶の間があってほしいな」という願いがあつて協力してくれるから**、ぼくたちもそれと同じように、ぼくたちの茶の間を大事に、プラス必要だなんて思ってもらう…簡単に言えば、**高齢者だけじゃなくて年齢関係なく、みんなが大切だなんて思える場所。プラスこの茶の間があってほしい場所。地域の人とぼくたちが、一緒に茶の間をつくらうって思つて、協力し合えることが大切**だと思います。

A児は、第1次において、実際に行った「地域の茶の間」の活動で得られた知識を活用し、来てくれた人がどう思うか、すなわち高齢者の立場に立って考えることが大切だと主張している。

続けて発言したB児は、第2次におけるモデルケースの調査・体験で獲得した知識を関連付けることで、高齢者の立場に立って考えることを具体的に考え、高齢者が和める場にすることを提案している。

そしてC児は、B児の発言に応答し、和めるようにすることの例を具体的に考え、特技発表を行うことが周りから称賛や会話のきっかけとなり、うれしい気持ちをもたらし、結果として気持ちも和むと考えた。

これら3人の児童は、第1次もしくは第2次で得られた知識を活用しているといった違いや、具体性という点においての違いはあるものの、いずれも「高齢者の立場に立って、気持ちを考えることが大切だ」と認識していると考えられる。

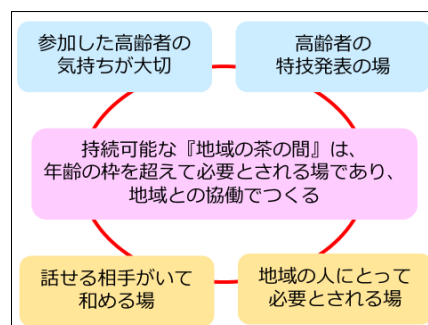
この姿を評価規準に照らして判断すると、「地域との思いの共有や協働」という視点で「地域の茶の間」の在り方を考えているかどうかまでは、まだ見とることができない。

一方、D児は、前述の3人とは、異なる。資料1にモデルケースで得た情報を整理することで、高齢者だけではなく、地域の理解や協力があって初めて持続可能な「地域の茶の間」が成り立つことを理解したからこそ、地域の人にとって必要な場とならなければならないと考えた。これは、「地域との協働」という点において、考えが広がってきている姿である。

そして、最後に発言したE児は、「考えがすべてつながって」と前置きしていることから、一連のやり取りの内容を関連付け、総合して考えた結果、「地域の茶の間」が継続するには、地域の協力が必要であり、そのためには地域の人に必要とされるように思ってもらわなくてはならない。つまり「地域の茶の間」は、年齢の枠を超えてみんなが大切だと思える場であり、そういう場をつくろうという思いを共有して地域と協働することが大切だと考えた。

この姿は、対話により第1次と第2次で得た事実的知識をつないで構造化し、持続可能な「地域の茶の間」の在り方についての概念的知識を創り出した姿である。

このことから、E児は、概念的知識として「高齢者のくらしを支える人々の取組や思いを基に、「地域の茶の間」は、地域の人と思いを共有し、協働でつくすることで持続可能なものとなること」を形成したと評価できる。

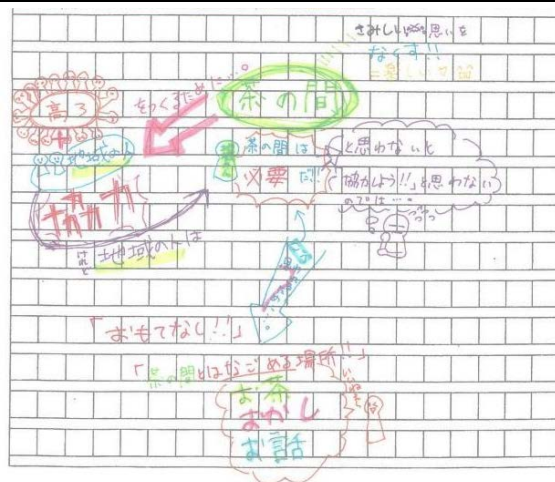


この話合いの後、授業者は、「一時的ではなく、ずっと高齢者のさみしい思いをなくせるお茶の間」をつくるためには？」というテーマで、自分の考えを作文シートに書くよう促した。

一連のやり取りにおける相互作用を、E児以外の子供の概念的知識の形成に機能させるためである。

< B児の作文シートより >

私は、「地域の茶の間」を地域の人と高3（私たち）で協力してつくるのが大切だと思います。けれど、「地域の茶の間」を地域の人と一緒にやるには、まず、地域の人に必要とされないといけないと思います。



作文の記述と関係図から、「（高齢者の立場に立って）どういうふうに和めるだろうかを考えることが大切だ」と考えていたB児も、話し合いを通して得た他の児童の考えや意見を聞いて、高齢者だけではなく地域の人との協働の必要性を理解し、概念的知識として「高齢者のくらしを支える人々の取組や思いを基に、「地域の茶の間」は、地域の人と思いを共有し、協働でつくることによって持続可能なものとなること」を形成していると評価できる。

（２）探究的な学習のよさ

第2編第3章（１）１－①に詳説しているとおり、探究的な学習のよさを理解している姿は、探究的な学習はよいものだとの観念的に説明する姿ではなく、総合的な学習の時間だけではなく、様々な場面で子供自らが探究的に学習を進めるようになることが、そのよさを理解した証となる。

したがって、総合的な学習の時間で学んだ内容が、他教科の学習や実生活にどのように活かされているのかについて評価することがポイントとなる。

①評価場面

子供は、第3次において、形成した概念的知識を活用し、参加した地域の誰にとっても必要な場にするには、どのように活動を工夫・改善すればよいかを考えた。その結果、高齢者の特技や地域の合唱サークルともコラボレーションの場を設けるなど内容に加え、「地域の茶の間」を複数回開催した。

その後、子供は最終的に持続可能な「地域の茶の間」をつくるためには、「活動を支援し続けてくれたコミュニティーハウスに主催を引き継ぎ、自分たちは協賛としてその活動に協力し続けるのがよい」と考えた。こうして、第4次の活動として、コミュニティーハウスの方々に自分たちの思いや願いを語り、協働して「地域の茶の間」を継続することを提案した。

本評価場面は、単元の終末において、これまでの活動を通しての自分の変化を振り返り、作文にまとめた場面である。

②子供の事実とその解釈、評価

＜C児の作文シートより＞

以前は人見知りで、近所のお年寄りといさつするだけで顔をそらしていました。けれど、今は年代が違うお年寄りにも顔をそらさないでいさつができるようになりました。お年寄りの趣味や好きなことがお茶の間の学習をして分かり、お年寄りと話することが多くなりました。

次に、（県外で離れて暮らす）祖父母とのかかわり方です。以前は、祖父母の家に行っても、自分の両親と話をすることが多かったです。でも、お年寄りのさみしさなどが分かってから自然と話せるようになりました。

C児は、両親とも県外出身者であり、父方と母方、両方の祖父母とは離れて暮らしている。本人も自覚しているように、人見知りの面があり、初対面の人と話す際には顔を赤らめる子供である。

この作文シートの記述からは、そのようなC児が、それまでは十分にできていなかった地域の高齢者や祖父母と、より自然で豊かにかかわれるようになったことを自己の成長として実感していることを見とることができる。さらに、このような成長の背景には、本単元で高齢者とその暮らしについて学んだことがあることも自覚していることが、「地域の茶の間の学習をして」と記述していることから捉えることができる。

活動場面のC児の姿においても、初対面の高齢者とも自分から話しかけて会話をしたり、昔の遊びをしたりする姿が観察を通して捉えられた。さらに、モデルケースの調査・見学においては、「地域の茶の間」が持続する工夫について、必要な情報が得られるまで粘り強く聞き取りも行っていた。

このように、C児は、学んだことが自分の生活と深く関わっていることに気付き、そのことが自己の成長につながっていると感じたからこそ、自ら探究的な学習を進めるようになったと解釈できる。

この姿から、C児は、探究的な学習のよさを理解していると評価できる。